園名　奈良市立帯解こども園

はばたくなら①③
「やりたい」「やってみよう」の思いの中の子どもの心　　～心の動きや行動の変化から考える環境構成と援助の在り方～

5 歳児　6 月～7 月

取組について
○日々の遊びの中で、遊びが継続しないという課題があった。そこで、子どもたちはひと・もの・ことをどう見て、どう感じ、どのように向き合っているのか、心の動きや変化を子どもの視点で着目して環境構成や援助をすることで、子どもの姿や活動がどのように変化し、子どもが「やりたい」「やってみよう」を実現していくのかを探ることとした。子どもの心がどのように動いているのか、遊びや生活の中にある子どもの姿を振り返り、実践事例を通して、心の動きや変容を捉える取り組みを続けてきた。
○実践事例①～③は、6 月～7 月の 5 歳児の遊びや活動を取り上げたものである。6 月頃からタイヤを使った遊びが展開した。園庭には、遊びに使うためにたくさんのタイヤが置いてある。そのタイヤを見つけた子どもたちがタイヤを積み重ね、それをお風呂に見立てた遊びが始まった。「お風呂にするんやったら、中に水入れてみる？」という保育者の声掛けから、タイヤの中に水を溜める遊びが始まった。その中で、友達と目的やイメージを共有し、アイデアを出し合いながら試行錯誤する姿が見られたため、友達と関わりながら遊べるような援助や環境構成を行った。また、6 月下旬には、5 歳児クラスの園内公開保育を行い、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の視点から、遊びの中で見られる子どもの姿を読み取り、職員間で話し合った。

実践事例①「タイヤ温泉をつくろう」

タイヤを積み重ねてつくったお風呂に、水を溜めようと試みるが、タイヤの下から水が漏れている。「水を溜めたい」という共通の目的をもち、友達と一緒に試しながら遊んでいる。何日もかけて、水漏れしない方法を考えた。

①砂や土を使う

「砂を置いても、水が溜まらへんな～」　ア　イ　カ

自分達で考えたり試したりしながら、遊んでほしいな。
→声掛け「なんで水が溜まらないのかな？」

「築山の土は固いから、これで固まるはずや」　ア　カ

今までの遊びの経験から、築山の土が固まりやすいことを思い出したんだな。

「土と砂を混ぜたらもっと固くなるはずや！」　ア　カ

なかなか水が溜まらなくて子ども達が悩んでいる。最初より水が溜まってきていることに気付いて嬉しさを感じてほしいな。
→声掛け「タイヤの 2 つ目の線まで水が溜まってきているよ。」

②サンダルを使う

「土以外のもの…あ！サンダル使えそう！」
「少し水漏れ止まった！」
「でもやっぱり水が出てきてる…」　ア　イ　カ

身の回りにある使えそうなものを見つけたんだな。面白い発想だな。どうなるのか見守りたい。
→見守り

③話し合いをする
（初めてクラス全体に投げかけた）

なかなかうまくいかないため、クラスの他の子ども も遊びに巻き込んでいきたい。

ア　保育者「どうしたら水が溜まると思う？」
A 児「先に土で周りを固めてから水を溜めてみる？」

クラス全体で共通の目的やイメージをもってほしい。

ウ　B 児「確かに。でも、土は水に弱いねん。」
オ　保育者「水に強いものって何があるかな？」

友達と一緒にアイデアを出し合って考えてほしい。

ケ　C 児「じゃあ、石とか使ってみる？」
B 児「それいいね！」

土や水の特性に気付き始めているな。

他の遊びをしていた子ども も、話し合いをきっかけにこの遊びに入ってきてほしいな。
→話し合いの内容を、次の日もホワイトボードに書いて残しておく。

子どもの声　　保育者の思い → 援助、環境構成

④石やまな板、草などを使う

「今日はまず、みんなで手分けして石集めよ！」
「僕は砂場で探すから、〇〇くんは畑の方を探してきて！」　ア　ウ　ケ

話し合いをしたことで、他の遊びをしていた子どもも様子を見に来ている。このまま遊びに巻き込んでいきたいな。
→誘い掛け「話し合いで石がたくさんいるって言ってたよね。一緒に手伝ってくれる？」

「水はいっぱいになったら重くなるから、石も水に負けちゃうんじゃない？」
「でもまな板は硬いから、重い水にも勝てるかも」
「でも隙間ができてるから水が漏れちゃうな…」　ア　カ

水の重さや水圧に気付き始めているな。周りの子ども達にもこの気付きを広げたい。
→話し合いで取り上げる。（③の話し合い以降、クラス全体がこの遊びに興味をもち始めたため、毎日話し合いの時間を設けた。）

「草とか葉っぱは細いから水が出てくる隙間を埋められるんちゃう？」　ア　カ　キ

水漏れする場所や穴の大きさを見て、何が使えるかを考えて工夫しているな。

⑤ブルーシートやゴミ袋を使う

「ブルーシートを敷いたらいいんじゃない！？」
「あれ？シートの小さい穴から少しずつ水漏れして水が溜まらない！」

ブルーシートの代わりになるものを思いついてほしいな。
→ヒントを出しながら一緒に考える。「水を通さない、穴の開いていないものって何かあるかな？」

「水漏れしてない！」

水を溜めることに成功！
タイヤの 2 段目まで水を溜められるようになった。

「2 段目から水漏れへんように、シートをぐるんって巻いたらいいんじゃない？」　ア　カ

成功した嬉しさを感じてほしい。
→クラス全員、一人ずつお風呂に入って遊べる時間をつくる。

温泉ごっこの遊びに広がればいいな。

「ぱんだ組（1 歳児）とか、ぞう組（2 歳児）のお友達にも入ってもらえるように、小っちゃい温泉もつくろう！」　ア　イ　カ

温泉づくりの過程で、たくさんの水を一気に運ぶために大きなバケツを使い始めた子ども達。水が重くて一人では運べず、友達同士で手伝って助け合う姿が見られました。

ア.健康な心と身体	イ.自立心	ウ.協同性	エ.道徳性・規範意識の芽生え	オ.社会生活との関わり
カ.思考力の芽生え	キ.自然との関わり・生命尊重	ク.数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚	ケ.言葉による伝え合い	コ.豊かな感性と表現

実践事例②「タイヤ温泉にお客さんを呼ぼう」

タイヤに水が溜まるようになり、温泉やさんを開くことになった。お店に必要なものをみんなで考えて作り、開店に向けて準備を進めた。

①お客さんを呼ぼう

「お店の人って分かるようにエプロンつくろう」
「温泉やさんのエプロンは『ゆ』って書いてんねん」

ア イ オ コ

遊びに必要なものを、自分達で考えてつくってほしいな。
→話し合いの時間を設け、みんなでアイデアを出し合えるように。

「石鹸を削る人と、泡を混ぜる人に分かれて、役割分担しよう！」

ア ウ ケ

友達と協力してつくってほしいな。
→みんなでつくれるように、泡立て器や石鹸の数を増やす。

②温泉がオープン

「他のクラスの友達とか先生とかも、温泉やさんに呼ぼうよ！」

他のクラスの友達や先生とも関わって遊んでほしい。

「店員さんが泡で体を洗ってあげるね～」

ア オ ケ

お客さんと店員さんに分かれてやり取りしながら、ごっこ遊びを十分に楽しんでほしいな。

「体についた泡を流しますよ～！そのあと温泉に入って下さいね♪」

「温泉入る時は並んでね」
「冷たくて気持ちいい！」

ア エ

水や泡の感触を全身で味わって楽しんでほしい。
→声掛け「冷たくて気持ちいいね！」「泡フワフワやな～」

③小さい子も呼ぼう

「ぞう組さん（2歳児）が溺れへんように、温泉の水は少なめにしとこう」

ア イ オ

年下の友達を思いやる気持ちをもちながら関わってほしいな。

実践事例③「タイヤ温泉の絵をかこう」

水遊びの共同製作に取り組んだ。クラスで話し合い、タイヤ温泉の絵をかくことになった。友達と役割分担しながら、協力して作った。

①みんなで協力してつくろう！

「温泉の入り口のマット何色やったっけ？」
「青色やったで！」

ア ウ ケ コ

友達と相談して、遊びの様子を思い出しながらかいてほしい。

「僕、字書かれへんから〇〇ちゃん手伝って～」

ア ク ケ コ

友達と協力する楽しさや充実感を味わってほしい。

②タイヤ温泉の絵が完成

「ついに完成したな！」
「めっちゃ頑張ったわ～」
「時間掛かったもんな」

最後まで頑張って取り組んだ達成感を味わってほしい。

ア イ ウ コ

（まとめ）

・実践事例①では、「水を溜めたい」という共通の目的をもち、友達と試行錯誤する姿が見られた。遊びの後に話し合いを繰り返し取り入れ、クラス全体で気付きや困りごと、新しいアイデアなどを共有できたことが、友達と協力する姿に繋がったと考えられる。また、5 歳児なりに、「石は重いから水に負けないかも」と予想したり、「土は弱いから水に負けちゃう」「石は隙間ができるから水漏れする」などと原因を考えたりする姿が見られた。「土と砂を混ぜる」「草を使う」「ブルーシートを敷く」など、様々な方法を試行錯誤して考える中で、「いいこと考えた！」「成功したよ！」などと、子どもたちが心を動かす瞬間も多く見られた。

・実践事例②では、他の学年の友達や保育者へと関わりを広げることができた。異年齢の交流の中で、「溺れないように温泉の水は少なくしておこう」と水の量を調節したり、「温泉までお姉ちゃんたちと一緒に行こう」と優しい言葉で接したりするなど、年下の友達を思いやりながら関わる姿が見られた。

・実践事例③では、経験したことを製作として表現することができた。共同製作にしたことで、友達と相談したり、役割分担したりしながら、1 つのものをつくり上げていく充実感や達成感を感じられた。

（成果）

・タイヤを積み重ねる遊びに対し、「どうやったら水が溜まるのかな？」と、保育者が子どもたちに一つの問いを投げかけたことで遊びが発展し、さらに援助を重ねていくことで、また遊びが展開していくという循環ができた。また、園内公開保育の機会を通して、様々な保育者の視点から、遊びについて話し合うことで、子どもの姿を見取る精度を高めたり、幼児理解を深めたりすることができた。

（課題）

・今後も、子どもたちが「やりたい」「やってみよう」と心を動かしながら遊べる援助や環境構成について保育者間で話し合い、学びを深めていきたい。

・友達と一緒にアイデアを出し合ったり、試行錯誤したりするなど、子どもたちが自己を発揮しながら主体的に遊ぶ姿が見られている。引き続き、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を手掛かりにしながら、子どもたちの資質・能力を伸ばしていきたい。また、このような子どもの姿を小学校に引き継いでいくことで、幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を小学校の教科教育等につないでいきたい。